

## 新たな豚の家畜改良増殖目標の骨子案に対する都道府県の意見・要望及び対応方向について

No	該当箇所	項目	意見・要望	対応方向
1	1	現状と課題	① 海外種豚の利用が増加傾向にある中、国内での種豚改良の必要性を明確に打ち出していく必要。骨子案では、豚肉の内外価格差への問題点を指摘しているが、種豚の安定供給・確保の観点での問題点は明記できないか。 ② 上記の国内での種豚改良の必要性を示した上で、改良手法としての開放型育種について、どの機関が主導的な立場になるか明記できないか（例：改良センターが主体となって、都道府県・民間種豚場が有する優良な改良素材）。	種豚の安定供給・確保の観点も今後の課題の一つと認識しており、ご指摘のとおり「1 改良増殖をめぐる現状と課題」において記述することとする。 また、骨子案では関係機関の連携強化を図ることとしているが、今後、具体的な協議を関係機関と行い協力体制を構築していく予定であることから、現時点で主導的な立場の機関を家畜改良増殖目標に明記することは適当ではないと考える。
2	2(1)①	繁殖能力	繁殖能力を高くすることにより、子取り用雌豚の泌乳性が向上し、産子数の増加により、妊娠期間中の栄養要求量が現状より高くなる可能性がある。このため、特に繁殖に関する遺伝的能力が高い純粋種豚については、栄養要求量にも留意しつつ、遺伝的能力の改良を進めることが望ましいと考えられる。	繁殖能力と栄養要求量との関係については、今後の課題として検討していきたい。
3	2(1)	繁殖能力	(表1について) ランドレース種、大ヨークシャー種の繁殖能力については、海外の先進事例にひけをとらない能力向上を進めると記載が骨子案の項目1に記載されているが、10年後の目標値としてこのことを反映した数値となっているといえないのではないか。	繁殖能力の向上については、改良体制の強化が前提となっているところであり、その体制構築も踏まえて純粋種豚の数値目標設定をしているところである。 純粋種豚の能力を基に、「肥育もと豚生産用母豚の能力に関する数値」を参考に定めているが、その中で「1腹当たり年間離乳頭数」は海外の先進事例(米国等)と同程度の目標値となっているところ。
4	2(1)	産肉能力 繁殖能力	(表1について) ① デュロック種については、三元交配肉豚の止め雄として活用することが主流となっており、発育性(飼料要求率を含む)や産肉性に加え、特徴ある食味の向上に繋がる形質の改良が求められる。この意味からもD種は繁殖能力の目標値は抑え、産肉能力の改良の目標値に力点を置く必要がある。H37年度のD種の目標値について、1日平均増体量が増加する一方で、飼料要求率が他の品種並みであることに疑問を感じる。両者の相関が高いということが目標数値に反映していないことや、飼料要求率は飼料の大部分を海外に依存する日本にとって重要な形質であるという認識に欠ける数値目標といえると考ええる。 ② また、産肉性を追求した海外と違い国内ではおいしい豚肉生産づくりのため、ある程度の背脂肪厚は必要であると考え、D種背脂肪厚の目標数値をL種やW種より抑えた理由を伺いたい。	デュロック種の飼料要求率については、ご指摘のとおり、飼料要求率は経営コスト削減につながる重要な形質であると認識しているものの、改良機関等で測定できていないため、これまでの改良の傾向及び1日平均増体量との相関(表型値)を踏まえ算出・目標設定したものであり、今後の課題の一つと考えている。 背脂肪厚については、「薄め」を求める傾向であり、現状維持が適当との意見であったことから、現在値をそのまま目標値としておいたものである。
5	2(1)②2)	産肉能力	(表1について) 背脂肪の厚さの目標値がパークシャー種のみ、現在値よりも厚くする目標になっているのはなぜか(他の品種は、現行の目標値(32年度)を既に上回った現在値を目標にしているが、パークシャーのみ、現行の目標値を現在値が上回っているにもかかわらず、次期計画の目標値が現行の目標値と同じである理由を御教授願いたい。)	パークシャー種の産肉能力については、背脂肪層の厚さについては現状維持とする。
6			(表1について) パークシャー種育成豚(体重 105kg 時点)の背脂肪厚さについて、平成 37 年の目標が 2.2cm となっているが、現在の平均は 2.0cm であり、近年の改良は背脂肪を薄くする方向で考えるため、現状維持の 2.0cm で良いのではないか。	
7	2(1)他	体型に関する改良目標、その他	改良の際には、種豚が長持ちし維持管理しやすくなるよう肢蹄の強化や、飼養管理しやすい温順な性質の維持・改良についてもあわせて考慮等する必要があると考える。	肢蹄の強化については、つなぎ評価の指標化を検討しているところであるが、その他の項目については、改良形質として有用かどうかも含め、今後の検討課題としたい。
8	2(1)	その他	農家における生産性を向上させていく為には、その他の項目として気質や耐暑性についての指標も、今後、考慮等していく必要があると考える(趣旨のみを記載。補足説明部分は割愛)。	

9	2(2)	体型に関する改良目標	近年の発育能力の改良により、繁殖豚の体形(成熟時体重、体長や体高等)が大型化しており、繁殖雌豚が標準サイズのストールに収まらないなど、生産農家の繁殖豚飼養管理に課題が発生している状況にある。このため、今後も、純粋種豚の産肉能力の改良を進めることで、繁殖豚の成熟時体形が大型化する可能性があることから、産肉能力の改良において成熟時体型の把握に留意する必要があると思われる。	体型については、純粋種豚の産肉能力の検定において調査項目に含まれていないことから、改良形質として有効かどうかも含め、今後の検討課題としたい。
10	2(3)②	改良手法	本県では複数系統の豚を造成しているため、改良は長期的な展望が必要である。そのため、改良手法として開放型育種の導入や導入について検討等する場合には、今後の方針決定の参考とするため、できるだけ早期に情報提供等をお願いしたい。	今後、改良体制について関係機関の連携を強化図ることとしており、開放型育種法についても関係機関と協議を行いつつ、必要な情報の提供等に努めてまいりたい。
11			我が国では、従来より「閉鎖群育種法」によって国や県で系統豚を開発してきたことから、「閉鎖群育種法」に関する知見は蓄積されている。しかし、国内における「開放型育種法」については、未だ知見が乏しいと思われることから、今後、国内の豚育種に「開放型育種法」を導入するのであれば、国や大学が主体となり、そのメリットや具体的な開放型育種方法(交配方法や育種価推定方法)について十分に議論して頂きたい。	
12	2(3)②	改良手法	口蹄疫等の家畜伝染病発生時に備えて、系統豚の遺伝資源の保存やリスク分散対策も重要な課題となっている。全国的な改良体制の構築を推進等する際には、あわせてリスク分散の仕組みについても検討されたい。	重大な伝染性疾病の発生により育種改良にも多大なる影響が及ぶことから、普段からの衛生管理は重要であるが、遺伝資源の確保の観点から、今後、改良体制の強化のための関係機関との協議の中でリスク分散の仕組みについても検討してまいりたい。
13	2(3)②	改良手法	繁殖性の向上に関することに特化した記載となっている。産肉性の向上への取組みについても記載すべきではないか。	産肉能力については、これまで一定の評価がなされていると認識しており、今回の家畜改良増殖目標については、海外の先進事例に遅れをとっている繁殖能力の向上を強化することとしているため特記したもの。
14	2(3)③	飼養管理	飼料用米の利用については、安定的な確保が必要であるので、継続した取組推進を願う。	飼料用米については、国の施策として増産、利用推進を図っているところであり、引き続き安定確保等がなされるよう、取り組んでまいりたい。
15	2(3)④	おいしさに関する指標	消費者からは豚肉のおいしさを求められており、おいしさ因子(甘味成分、オレイン酸等)に関して言及する必要があるのではないか。	豚肉におけるおいしさに関する指標化については、どのような指標が妥当なのかも含め検討・検証が必要であることから、現時点で具体的な因子まで言及することは適当ではないと考える。
16			おいしさに関する指標について、評価に関する科学的知見を蓄積し、評価項目や評価手法の検討等を図るとされているが、全国的に見ると既に具体的数値を示し、実践している事例が存在することから、おいしさ因子に関する5年後を目指した数値目標を示すべきではないか。	
17			「おいしさに関する指標」とともに「おいしさに関連する肉質」についても調査して頂きたい。今後、特に食味の面で輸入豚肉との差別化を図るためには、必要不可欠と考えられる。	